原田　裕規

［2007年度卒業／59回生］

美術家

1989年　山口県生まれ
2013年　武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科卒業
2016年　東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了
2017年　文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてニュージャージーに滞在

社会の中で取るに足らないとされているにもかかわらず、広く認知されているモチーフを取り上げ、議論喚起型の問題を提起するプロジェクトで知られる。代表的なものに「ラッセン」や「心霊写真」を扱ったものがある。主な個展に「写真の壁：Photography Wall」（原爆の図丸木美術館）、編著書に『ラッセンとは何だったのか？』（フィルムアート社、2013年）など。

自らの当事者意識と向き合うこと

ぼくは高校生のころから、美術に限らず「同時代」で起きている事柄に興味がありました。そして、この時代ならではの表現、それに最も近いジャンルが「現代美術」です。現代美術には、メディアによる規定がありません。絵画、映像、インスタレーションとなんでもありの世界。ただ、そんな世界でもひとつだけ求められるものが「当事者意識」です。「なぜ、あなたがその表現をするのか？」という問いに答えを与えられるのは、ほかならぬあなたのみ。無数の他者から浴びる厳しい視線を経て、その人自身の当事者性と表現が結びついたとき、その時代ならではの表現、「現代美術」が立ち上がります。創造表現コースを卒業して以来、ずっとぼくはこの舞台で格闘してきました。それは「誰か」に答えを求める人にとっては極限まで孤独で厳しい世界ですが、「自身」に答えを求める人にとっては極限まで自由な世界です。なぜ、あなたがそれを作るのか？　自身の制作に向き合うとき、その問い掛けを自らへ厳しく求めてみてほしいと思います。

編著書『ラッセンとは何だったのか？』（フィルムアート社、2013年）書影

個展「写真の壁：Photography Wall」（原爆の図 丸木美術館、2019年）展示風景